

終末期医療を考える

人口の高齢化が急速に進む中で、がんによる死者も増え続けています。2000年には年間30万人に迫ろうという状況です。いつ自分ががんの告知を受けるか分からないのが現実です。それに備えて、日頃から自分自身が死について考えておく必要があります。

人間も生物である以上いずれは死を迎えます。でも日常生活ではなかなか現実のものとして考えられません。終末期医療に従事する者として、意義ある終末期を迎えるために、夫婦、親子間でお互いの死を考え、もしがんになったら自分はどのようにしたいのか、家族に対してどうしてあげたいのか、本気で話し合うことをおすすめいたします。がんになって精神的ダメージの中で考えられるのではなく、自分の生き方を日頃から考えておくことが必要であると思います。がんは肉体をむしばむという事実がありますが、決して精神をむしばむ病ではありません。考え方としては、肉体の病と精神の病を分離して考えてみてはいかがでしょうか。

終末期医療に本当に必要なものは、死を迎えた患者さんと家族と医療従事者が人としてその空間を占め、ゆとりを持ってその時間を共に過ごすことの出来る環境をつくることであると考えます。

医療従事者は自分の価値観を押し付けたりせず、患者さんの話や訴えを心身を傾け聴き、受けとめ、患者さんがいつでもありのままの自分を表出できる信頼関係をつくっていくことが必要であると思います。そのことで患者さんは安心感を持ち、孤独感から解放され、残された人生を共に生きるという力が出てくるのではないのでしょうか。

今、このような思いで日々在宅医療、慢性期医療に従事しています。皆さんいっしょに考えていきませんか。

平成10年9月
小林 亮